

# 若き日の岩野泡鳴

— 滋賀県大津時代 —

三木正浩

はじめに

わが国自然主義作家のうち、最も異色ある作家として注目される岩野泡鳴が、その若き日、滋賀県大津にいたことは、世上よく知られているが、さてその具体的な内容になると、さつぱり分らない現況にあるので、このほど調査して知りえたところを、かいつまんで紹介してみたいとおもう。

\* 明治三十二年四月から三十五年九月までである。

## (一)

泡鳴が大津に来たのは明治三十二年四月で、彼の二十七才のときであつた。前年ごろから呼吸器を害していたので、<sup>①</sup> 転地療養かたがた来たといわれる。しかし、それにしても彼が東都をはなれてはるばる琵琶湖畔に来たについては、島崎藤

若き日の岩野泡鳴

村の小諸、<sup>②</sup> 国木田独歩の佐伯の場合のように、誰か彼を紹介する人がいたに相違ないが、いまではそれをただすすべもない。

はじめ滋賀県警察部の通訳と巡査教習所の英語教師をかね、月給は三十円<sup>③</sup>であつた。この年の八月に「英和警察会話篇」<sup>④</sup>という書をだした。はじめこの売上収益金から、後にのべる第一詩集の出版費用を捻出するつもりでいたが、予約を全国の各府県に募つて配本してみると、読者の送金が意外におくれ、たまに送金してくるものがあつても、おおかた生活費にまわり、手許に残つたものはいくらもなかつたという。

三十四年四月に大津に隣接した膳所町の県立第二中学校の英語教師になり、<sup>⑤</sup> 月給は四十五円になつた。そのころ県立二中は創立後まだ日も浅く、旧膳所藩の牢屋敷跡の粗末な仮校

舎から、いまの膳所高の敷地に移ろうとして前年秋から校舎の新築工事にとりかかっていた時分である。そこで彼が英語を担当したのは、下級生の一・二年生で、二中第三・四回卒業の人々である。

さて彼の中学教師ぶりはどんなであつたか。当時の彼の教え子たちにぼつぼつ聞きだしているが、なにしろ五十年も前にさかのぼることなので、人々の記憶もさだかではなく、ようやく次のようなことを知りえたのである。

①彼はいつも霜ふりの詰め襟の洋服を着ていたが、夏には黒のアルパカの上着に、白のズボン姿になり、雨天には長靴をはいていた。その風采は立派であつたので、入学式るとき新入生の父兄から校長と間違えられて挨拶をうけたことがある。<sup>⑦</sup>

②一、二年が敦賀方面へ修学旅行に出かけたとき、はじめ塩津に一泊し、翌日の午後、敦賀の宿屋につくと、一足先に到着した彼が、宿屋の主人にむかつて「客扱いがどだいなつたらん、けしからん。」と腕まくりでどなつていたのは、生徒たちに痛快この上もない印象を与えたという。<sup>⑧</sup>

③同僚のなかに彼の明治学院時代の学友で、国語担当の教師

がいた。この男は明治学院在学中、西洋人の先生を夜陰に乗じてなぐりつけたり、日本人の先生が意久地なしなので、排斥運動を起した経歴の持主であつた。彼は他の同僚とはあまり口を利かず、この男ととくに親しく交わつていたところから、二人が共謀して二中の校長堤寛氏の排斥をたくらんでいゝる、というデマがとんで迷惑を蒙つたことがあるという。<sup>⑩</sup>

④彼は英語教育を主とするミッション・スクールの明治学院や東北学院に学んだし（どちらも卒業しなかつた。）その上アメリカの宣教師を助けて讚美歌や宗教書の翻訳に従事したこともあるので、いなかの中学生相手の英語ぐらいは、彼には問題ではなかつたに相違ない。しかしなにもぶんに無資格教員だつたので、文部省の検定試験をうけに、同僚の上西茂吉氏といつしよに上京したが、試験委員がアメリカ帰りの津田梅子女史だつたので、女なんかに試験されてなるものかと馬鹿にしたはよかつたが、物の見事落ちてしまつた。<sup>⑪</sup>

⑤教室での彼はじつにこわい先生だつた、と当時の教え子たちは異口同音にのべている。英語の下調べをやつてこなかつたり、遅刻したり、後をふりむこうものなら、いきなりしかりとばされ、立たされたそうである。鬚面に近眼鏡を二つか

けてぐつとにらみつけるおそろしい顔には、いかな腕白小僧たちも頭があらなかつた。(彼のおそろしい顔つきは、まるでロシヤ人のようだった、と回顧する卒業生もいる。如何にも明治人らしい形容だとおもう。)そこで生徒の間に「仏隈川、鬼岩野……」(仏のように温厚な隈川先生に、鬼のようにこわい岩野先生の意味。)の歌がはやつたそうである。<sup>⑧</sup>

ところが、その彼が翌三十五年九月退職して帰京するとき、生徒たちにむかつて「どうだい、おれがもういなくなるので嬉しがる。これからはもう立たされる心配はないから、安心して勉強するがええ。」と長い頭をふりふりいつたので、それまではこわいとばかりおもつていた泡鳴先生も、おもいのほか気のいい先生だ、という印象を生徒に与えたという。<sup>⑨</sup>

注① 彼の妻も健康を害していたともいわれる。

② 藤村の場合は木村熊二、独歩の場合は徳富蘇峰、矢野龍溪

③ 三十三年六月には月給三十五円に昇給。同時に県内務部通訳

事務の嘱託となり、年手当三十円をうけた。

④ この書は翌年その内容を取捨選択して、「公用会話」という書になった。

⑤ 明治三十一年創立。四十五年に膳所中学校と改称。戦後は膳

若き日の岩野泡鳴

所高等学校と改称。

⑥ 教諭心得を命ぜられた。無資格教員だったためであろう。

⑦ 二中同窓会誌第四号。

⑧ 同右。

⑨ この人物は彼の自伝小説「放浪」に有馬勇の仮名で登場するが、このモデルは二中の旧職員有竹捨氏であることを最近発見した。その理由としては、姓の有馬と有竹とが非常によく似ていること、氏の二中在職期間が明治三十三年八月から翌年十月までで、泡鳴と同僚だった時期が半年余あること、氏が明治学院に学んだことは氏の履歴書に明記してあること、氏が国語担当だったことは、膳所高同窓会名簿に明記してあること。(明治学院に学んだ氏が国語を担当したのは、明治学院修了後、国学院を卒業した事情による。)などがあげられる。(読書新聞本年六月六日号拙稿参照)

⑩ 明治三十二年より大正十一年まで在職した二中二代目の校長。名校長とたたえられたが、そのスパルタ式教育が災して在職中二回もストライキ事件がおきた。昭和二十九年三月死亡。

⑪ 泡鳴の「放浪」

⑫ 笹淵友一「浪漫主義文学の誕生」吉田精一「自然主義の研

究」

⑬ 滋賀県庁倉庫にある泡鳴の履歴書。

⑭ 明治三十四年より昭和五年まで在職。泡鳴と最も親交のあつた数学担当の同僚。泡鳴の退職後も上京のつど彼の家に立ち寄り饗応をうけたそうである。昭和三十三年死亡。

⑮ 二中卒業生久保井末造氏が上西氏より直接聞かれた話である

⑯ 彼の二中在職期間は明治三十四年四月四日より三十五年九月八日までである。

⑰ 前記同窓会誌。

(二)

彼は大津にいたころ、よく土曜日から日曜日にかけて比叡山に登り、天台宗の経文を熱心に研究した。そのころ、彼の義兄の竹馬の友で、比叡山に十五年も修行していた僧が、修行を終えて下山すると、たちまち女のために墮落してしまい、世間を驚かしたことがあつた。しかし彼はそれをきいて驚くどころか、「それは墮落でもなんでもない、人間として当たり前になつただけじゃないか。」とおもつた。

また彼は滋賀県にある禅宗の本山、永源寺へも出かけ、と  
きの管長久松琢宗師にあつて禅を学んだ。① 彼はこの老管長に

むかつて「禅の主眼となるものは何でしょうか。」と無遠慮にたずねると、管長はしばらく考えこんでいたが、「まあありませんな。」と答えた。彼はこれをきいて、「この人はどんなにえらいかは、ぼくなどにはわからないが、とにかく自分の立場に主眼がないなどと、はつきりいい切るのはよほど勇気の要ることだ。」とその管長の人柄によほど感服したが、② 禅の方はぶつたりやめてしまつた。後になると「禅は一種の催眠術だ。」と罵倒し、はては「ただぬらりくらりとした不真面目な態度でその無内容をごま化しているにすぎない。無我とは結局無内容だ。無内容は空だ。空な物からは何物もかちとすることはできない。現代に必要な自我の充実と国家の発展からすれば、国外に追放すべきだ。」とまで言い切るようになった。③

注① 彼は仙台にいた時分も、松島で参禅したことがある。

② 泡鳴の「永源寺遊記」舟橋聖一「岩野泡鳴伝」

③ 泡鳴の「憑き物」

(三)

彼は大津の上平蔵町三十七番屋敷に住んでいた。① 現在の近

織財務局の一軒おいて東隣りの一入口は道路よりこころもち高い一階家がそれである。家の裏はいまでは民家が建てこみ、材木おき場となつているが、そのころはいまも残る常夜燈の近くまで湖水が入りこみ、対岸の山田、矢橋あたりから野菜や肥桶を運んでくる和船の荷揚げ場であつた。その二階からは琵琶湖を一望のもとにおさめて見晴しはよく、なかでも月の明かるい夜の湖上の風景は素晴らしいものであつた、と妻はかいてゐる。

書齋には木箱に紙をはつたのをいくつも積み重ねて書架代用とし、なかに洋書や和書がぎつしりならんでいたらしく、そこで彼はしきりと英詩をよんだり、新体詩をかいたりしてゐた。読書に疲れると、着流しのまま街をぶらつき、県庁近くの東枝という書店の店頭でよく本の立ち読みをしてゐたさうである。

家庭には妻幸子と次女富美子がいた。長女は天津に来る前に死んだ。三十四年に長男の論鶴が生まれた。この子はよく肥えてはいたが、顔色がわるく筋肉の発達も十分でない弱い子であつた。ついに翌年一月六日に気管喘息から肺炎をおこして死んでしまつた。そのときの模様を「再び児を失へる

記」のなかに次のようにのべてゐる。

妻、この出づる魂を追ふが如く論鶴、論鶴と声を放ちぬ。嗚呼、前日来目はたきもせず、人の顔を見つむるを、勢つきしならんと話合へるは、父母の慾目にて、全くおのが苦しみを無言に訴ふる心なりけんものを。死後は再び無邪氣の顔つきに復し、安らかに仰のけるままに寝かし置きつ。明日を待ちて大谷村の火葬場に送り、遺骨は東京へ携へて行き、先の亡児と相並べて之を葬むるに定め、われら共に眠りぬ。

七日朝、起き出づれば、比良の山一面に雪を以て白し。去年の冬、堅田の方に當つてふとき虹の立てるを認め、翌朝に至つて同山に大雪降りしことを知りつ。今や再びその朝晴れを見て児を失へる悲しみあり。嗚呼、積むものは積みよ。消ゆるものは消えよ。無天の天、いづくにか増減あらん。

この文は彼にも子への愛情をもちえた時代のあつたことをはつきり示す記念すべき資料と思える。なぜかならかほどまで亡き児への追慕の情を感傷的な筆致でのべるが如きは、後の自然主義作家泡鳴にはもはやみられなくなる。それが証拠に、

小説「毒薬を飲む女」のなかで、大津での長男の死は、二度目の兄の死でもあつたし、たつた九ヶ月をそう抱きもしなかつたから、べつに惜しくもなかつたとのべるし、また同じ小説のなかで、四男の死んだときは、その死去の通知に接しても葬式の煩わしさを感じるばかりで、哀れなど感じなかつたとのべている。かつて正宗白鳥が、泡鳴を評して、子供にたいてはほとんど愛情らしいものを感じないのは、日本の作家のうち類例を絶しているといつたことがある。いかにもとうなづける。

妻幸子は旧姓竹腰、彼の最初の妻で、彼の文学とは切つても切れぬ関係の深い女性である。二才のときから東京に育ち、ながく横浜の小学校の教師をしていた。おも長の上品に艶々しい顔に姉のような優しみをおり、その着物の着こなしさえ、他の田舎出の女学生などとはちがい、いかにもしなやかな姿に心ひかれ、むりやりに自分の家につれて帰つたのである。このようにして結婚した妻であるのに、のちには彼女を「無常識の強慾婆ア、虫のよすぎる鬼子母神」などと毒つき、はては三下り半を突きつける破目になる。では大津時代はどうであつたらうか、それを明らかにするために当時彼の

かいた「月の虹」を次にかかげてみよう。

あまり月のよかりければ、食事を速かにすませ、妻子を伴ひて三井寺に上る。今か今かと待ちつる甲斐ありて大形なるうろこ雲のうしろより月全身をあらはせり。しかもその月の笠なるもの、雲高きを以て、小さき輪をめぐらし、そを染めなせる色彩の一種いふべからざる妙味を帯べるあり。瑞西の国などにて「月に虹」といふは、即ちこれなり。われら嘗て新婚の楽しみ胸にあふるる窓に寄り、東都の月は之と相類するものを見しことあり。われ昔を思ひ出して語り出づれど、無邪気なる妻は既に之を忘れ居るなり。且かれ、意をいだけの乳飲み児に注ぎて、この明月の夜をそのやさしき寝顔と相比ぶるもの如し。忽ち月、光を増してその円き輪は明かに七色染わけを現す。妻無言にて之を仰ぎ見ること久し。

このロマンチックな詩的表現の文章からも、また当時近く三井寺や石山寺、遠くは竹生島や京都などへ夫妻そろつて見物に出かけることの多かつた事実<sup>⑥</sup>からも、さらには後年彼が北海道を放浪して、さきにふれた有馬勇の家に寄食したおり、有馬の妻君が彼の大津時代をしごく田満で幸福そうであ

つたが、と回顧すると、彼はあの時代は三つ年上でヒステリックな妻の性格上の欠点はまだ表面化しなかつたので、と弁解していることなどからも、当時の彼の家庭生活は、後の自然主義作家時代の乱脈と混乱をきわめたそれとはちがひ、いかにも波瀾のない幸福そうな生活であつたことが察知できよう。

なおそのころ右にのべた比叡山・永源寺・石山寺・三井寺・竹生島のほかに、滋賀県では伊吹山・彦根・愛知川・三上山・藤樹神社・比良の八池の滝、京都では宇治・高雄など、ずいぶん広範囲に歩きまわり、それぞれに遊記をかいているのは、自然詩人としての当時の彼の一面をうかがうにたる資料として興味深い。

注① 彼の履歴書による。

② 当時の二中同僚隈川豊氏談。

③ 友人三上修道氏嚴父談。

④ 現在の天津市大谷町（逢坂山下）にその頃火葬場があつたが現在は使用していない。

⑤ 泡鳴の「放浪」

⑥ 同右

若き日の岩野泡鳴

(四)

当時は彼はまだ小説には手を染めてはおらず、すでにふれたように、新体詩の創作に余念がなかつた。彼が詩をつくりだしたのは、国木田独歩や加藤咄堂らと「文壇」という雑誌をだした明治二十三年ごろに始まるといわれるから詩人としての経歴はよほどふるいほうであつた。従つて新聞、雑誌に発表したものがかなりの量にのぼつたので何とかまとめて世にだしたいものと、あちこちの書店に交渉してみたが、なにぶんにも詩人としての力量を、まだ十分に認められておらない彼の詩集など、ひきうけてのなかつたのも当然のことであつた。そこで仕方なく、そのころ大津の後在家町にあつた古川という書店から、第一詩集「露じも」として自費刊行したが、その売行はさっぱり駄目であつた。それもそのはず

払へば 散る 白つゆ

消え失する には あらず

仰ぐ そら に 神 植ゆ

星は 根掘 ず べからず

のように、十音詩の二重韻の脚韻をふんだものや、欧文の形

式にならつたらしい詞句の分かち書などに、彼独自の新しい形式を認めることはできるとしても、時を同じうして藤村の「落梅集」、泣菫の「行く春」、鉄幹の「紫」などと比較してみると、ときの帝国文学が「句調優にあはれるものなれど、着想平凡。」と評したように、未熟平凡、生硬粗雑を免れぬものであつた。

注① 吉田精一「自然主義の研究上」

② 明治三十四年七月。

—むすび—

結論としていえば、そのころの彼は、たしかに健康には恵まれなかつたであろうし、東都を離れて中央の文壇からはやや忘れられたかたちではあつたにしても、彼の生涯を通じてまれにみる恵まれた生活環境のなかで、自然に親しみ家庭を愛し、激しい野望に燃えながら詩の創作に専念したロマンチックな湖畔詩人の時代であつたとおもわれる。

(昭和三十五年二月二十九日)